半井桃水『胡砂吹く風』　　本会監事　上田正利

激動の東アジアを舞台にした新聞小説『胡砂吹く風』は、東京朝日新聞に明治２４年（１８９１）１０月から明治２５年（１８９２）４月まで連載された。連載開始から、令和３年（２０２１）１０月で１３０年を迎え、対馬市では現代語版が完成、静かな注目を浴びている。作者は、国境の島、対馬出身の半井桃水（なからいとうすい・万延元年（１８６１）～大正１５年（１９２６））、ペンネームは桃水痴史（とうすいちし）。

半井桃水館（半井桃水生誕の地）

この小説は、明治維新後の日本と李朝末期の朝鮮半島を材料に、両国の間に生まれた一人の青年が激動の朝鮮政界で大活躍するもので、１９世紀末の日本で人気を博した。隣国の政治停滞や旧弊への容赦ない描写に複雑な受け止め方もあるが、人情と風俗を生き生きと描いた点に評価が高い。

描かれた時代は、１９世紀末の朝鮮。王族の大院君と次男高宗の妻閔（びん）妃の政争が泥沼化していたころである。小説の主人公は薩摩の武士と朝鮮貴族の娘がもうけた対馬育ちの林正元。流暢な朝鮮語を操り、新日的な開化派士族や指導層の信任を得て、ロシア接近を図る勢力と戦う冒険譚だ。

作中、朝鮮の政治腐敗、反日感情を露骨に非難する場面、朝鮮政界に発した日本への侮辱表現を林正元が西郷隆盛に報告する場面は、実際に西郷が唱えた「征韓論」の端緒を創作的に描いたという説もある。

作品は、林正元らが新露派を破り、日本、朝鮮、清の「三国協和」の理想をみて完結する。

だが、その後実際には対清、対露戦を経て朝鮮半島統治に突き進む。桃水が再び朝鮮を題材に筆を執ることはなかった。

１０数年前、韓国で翻訳されると、メディアは同作が日本の侵略志向に与えた影響を疑った。翻訳者も帝国主義的な精神を鼓吹した小説の好例と紹介した。

桃水は少年時代、医師の父に伴い釜山の日本人居住区（倭館）で過ごした経験をもつ。東京での生活を経て新聞社通信員として、再び渡航。帰国後、新聞小説『胡砂吹く風』を１５０回連載した。

桃水は、樋口一葉（明治５年（１８７２）～明治２９年（１８９６））が思慕したことでも知られている。一葉が、小説家志望の意思を伝え、指導を仰ぐために桃水のもとを訪ねたのは、ちょうど東京朝日新聞に『胡砂吹く風』が連載された明治２４年、一葉２０歳、桃水３２歳の初夏４月１５日のことであった。

一葉の桃水に寄せる思いが、２５年という短い生涯を通して消えることがなかったことは、死後発表された日記によって明らかである。

一葉は『胡砂吹く風』を「もとより文章粗にして」と苦言を呈しつつ、感動したことも述べている。一葉は『胡砂吹く風』の刊行に、「桃水うしがものし給ひし“胡砂吹く風”を見まいらせてかくは、朝日さす　わが敷島の山桜　哀れかばかり咲かせてしかな」と寄せている。

また、作中の開化派士族のモデル 朴泳孝(ぼくえいこう)は書籍版で題字を書いている。

桃水は大正１５年（１９２６）１１月２１日福井県で静養中に倒れて死去、数え年６７歳。東京馬込の養昌寺の半井家代々の墓に合葬されている。戒名は観世院謡光冽音居士。

本稿は令和７年６月例会の発表の要旨である。

参考資料

高橋和彦『一葉と桃水』久留米大学論叢第３１巻第２号　１９８２年
三峰五郎（現代語訳）『胡砂吹く風』ＮＰＯ法人対馬郷宿（半井桃水館）　２０２０年
上垣外賢一『ある明治人の朝鮮観―半井桃水と日朝関係』筑摩書房　１９９６年

原文は、国立国会図書館のwebsiteにて閲覧可能